企　画　名：まつもと子ども留学　スタートアップ強化／こころのケアプログラム
団　体　名：まつもと子ども留学基金

1. 報告要旨

東日本大震災で被災した、とりわけ福島で放射能の影響を受けやすい子ども達を福島から自然豊かな長野県松本市四賀地区で生活し、遊び、勉強する施設（子ども寮）を提供し、子ども達の現在と将来の健康と命を守り、健全な育ちを保障することがこの事業の目的である。

福島の子ども達は原発事故後から、食べ物をはじめ、外遊び、海、山、川など自然と触れあうことなど、子どもの成長には欠かせない体験が奪われている。人間らしい活動的な体の育ちや情操の育ちが保障されず、将来にわたる影響は懸念されている。子ども寮に留学した子ども達も、留学するまでの 3 年間は野外活動が制限されて過ごしていたため、転校当初は大変疲れやすく、学校へ車で送る日もあり、中学校校門までの長い坂も、休み休みでしか登れなかった。部屋をちょっと掃除をしただけでも、疲れたといっていた。

しかし、留学して1年を経て、全員が坂を休まずにのぼり切るようになっている。部活動もバレー部、吹奏楽部、剣道部と意欲的に参加できている。

また、福島では放射能に対する心配や不安が学校の先生や友達と違うことで、不登校になってしまった子ども達もいる。「先生への不信感」と「友達から孤立」で、人とのかかわりに自信をなくしていた。しかし、その子ども達は、留学して、現在、友達を得て、先生を信頼し、元気に学校生活を送れるようになっている。

子ども寮は、留学を希望する子どもたちが経済的理由で諦めることのないように、親御さんの負担をできる限り少なくするという見地で運営しているので、人件費や運営経費は NPO の会費と市民や団体の寄付でまかなわれている。子ども達を早期に松本市四賀地区で受け入れるため、わずか半年の準備で寮を開設した関係で、財源の心配は大きく、この 1 年スタートアップ強化として寄付の募集と広報活動に力に入れてきた。

またボランティアなど人的支援も呼びかけてきた。地域のメディア(新聞やラジオ)などの協力もあり、食材や物品の寄付が日常的にあり、大変助かっている。地元や全国からのお米の寄付、海外からも子ども達への贈り物もあった。人的支援では、四賀社会福祉協議会のボランティアが、毎月のべ 20 人も、調理の手伝いに来てくれている。JA 青年部や、信州大学生が交流の企画をしてくれた。そして市民、団体からの寄付金も多く寄せられた。また生活協同組合などの団体からの助成金やチャリティの売り上げの寄付もいただき、多くの市民や団体の温かい支援のおかげで運営の土台作りはできてきている。

2. 成果物

1. リーフレット最新版（2 種）
2. ニュースレター（1 号～3 号）
3. 「福島の子供『留学』支えよう」市民タイムス（2014.4.2）
4. 「福島から四賀に　留学の子供にエール」市民タイムス（2014.4.3）
5. 「『子ども留学』長野へ 8 人」朝日新聞福島版（2014.4.8）
6. 「『四賀留学』広がれ支援の輪」市民タイムス（2014.5.13）
7. 「米国人の善意　避難児童に」市民タイムス（2014.5.28）
8. 「寮生活の小中学生を激励」「飯舘の子供　冬季キャンプ」市民タイムス（2014.12.16）
9. 「福島の子にわが家提供」中日新聞夕刊（2015.2.15）